ぷりんせすハーレム
お姫様は負けられない！
上原りょう
illustration ◎志水なおたか
美少女文庫
FRANCE SHOIN

プロローグ 夢の少女

空は藍と緋色が混ざり合った、とても綺麗な色をしていた。
もうすぐ陽が沈む夕暮れ時。
風はひんやり冷たくなって、きいきいとブランコの揺れる公園をさあっと吹き抜けていく。紺色の影に沈んだ公園のなかに建てられている外灯が点灯して、少年と少女へ明かりを投げかける。
「……おうちの人、見つからないね」
少年がぽつりと言うと、すっかりブランコをこぐ元気もなくなった少女が鼻をぐずりとさせてうなずいた。七五三の時みたいなキラキラした着物を着た女の子だった。
どうにか女の子を元気にさせてあげたい、少年はよしと勢いこんで少女に言う。
「うちに来なよ。それならさ、もっともーっと遊べるよ。お母さんの作るお菓子すげ

えうまいんだぜっ」
女の子はどうしようかと迷うそぶりながら、「う、うん」と小さくうなずく。
「じゃあ、決まりなっ！」
少年が少女の手をつかんだその時。
遠くで「姫さまー」「姫さまー」と呼ばわる声が聞こえた。すると女の子の顔がぱあっと輝いた。
「おむかえが来た」
ぽつりと少女が言った。
「え……ほんとう！　よかったじゃんっ」
しかし、少女の表情はそれほど喜んでいるようには見えなかった。
「……どうしたの？」
「おわかれになっちゃう。せっかく、お友達になれたのに」
女の子が今にも泣いてしまいそうな、悲しい顔でぽつりとこぼす。
「また遊べるじゃん。今夏休みだしさっ、今度また遊ぼうよ。いつなら遊べる？　ぼく、むかえに行くよっ」
「だめなの。わたし、とっても遠いところから来たから。だから、いつまた来られるかわからないの……それに……」

もごもごと少女が口のなかでなにかをつぶやく。
「ねえ、きみはお姫さまなの？」
少女はびっくりしたように顔をあげた。
「今ひめさまーって呼んでたじゃん。きみってアメリカのお姫様？」
お祭りの神輿（みこし）をかつぐかけ声みたいに、少女を探す声はだんだんと公園のほうに近づいてくる。
「ううん……。くずりゅーとーっていうところ」
少年は小首をかしげた。よくわからなかった。
それでもともかくお姫様なんてものはずっと前、母親と行ったテーマパークのパレードでどでかい乗り物の上に立って踊る、ドレス姿の綺麗な女の人以来だったので、とても興奮した。
「いいなあ！　くずきりとーのお姫様かあ」
「くずりゅーとー」
少女が訂正する。しかし少年はそんな声を無視して、『姫＝お金持ち（イコール）』という発想でいろいろな想像をたくましくさせた。
「くずきりのお姫様ならさ。毎日おいしいものとかいっぱい食べられるだろ？　おもちゃだっていっぱい買ってもらえるんだろうな。いいなあっ」

「ううん。いろいろやらなきゃいけないことがあるし、それに母上様、いつもどっかいってて、さびしいだけだもん」
「へえ……そっかあ。……よし。それならこれ、あげる」
少年はポケットをがさごそと探って、おもちゃの指輪を差しだした。
「え？」
少女はどうして指輪が出てきたのかわからず、少年の顔を何度も見直す。
「指輪。これ……ちょっと、傷ついちゃってるけど。やるよっ。けっこん……結婚しようぜ！」
少年の顔がほんのりと赤くなっていた。
少女のほうも戸惑いながら、やっぱり女の子だ。『結婚』という言葉に反応する。
「えぇっ……あ、あの結婚って……」
女の子の顔が見るみるうちに、薔薇（ばら）のつぼみのように紅潮していく。
「い、いいから！　はい、これやる」
少年は無理やり少女の手にそれを握らせた。
「これでぼくたちは結婚した。大人になったら、ぜってえ迎えにいくからな！　その時はぼくが王様。それで二人でずーっと一緒に暮らそうぜ、それなら全然さみしくない。そうだろっ、さびしくないだろ！」

ぽかんとしていた少女も、少年の不器用なやさしさに触れて、何度もうなずいた。
「う、うんっ！　そうしたらさびしくない、さびしくないね……ありがと、へへ」
少女が満面の笑みをかえしてくれる。
「じゃ、じゃあな！」
少年は恥ずかしくてたまらなくなって、きびすをかえして走りだす。
「ま、待って」
少女の呼びかけに足をとめて、振りかえる。
「わたしは、――――っ。あなたのお名前は？」
少女が精いっぱいの声を張った。
「ぼくは、けいいち！　もりみけいいちっ！　ぜってえむかえに行くから。くずきりとーにさ！　じゃあなっ！」
少年は正体の知れない昂揚感を覚えながら、とにかく走って公園を出た。
「おお、姫様！　こんなところに、探しましたぞっ」
少年の背中で男たちの喜ぶ声が響くのがわかった。